

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520035  
 研究課題名（和文） 20世紀以降のフランス哲学における、現象学と科学認識論の関係に関する研究  
 研究課題名（英文） Research on the relationship between Phenomenology and Epistemology in French Philosophy from the 20<sup>th</sup> century onward.  
 研究代表者  
 米虫 正巳（KOMEMUSHI MASAMI）  
 関西学院大学・文学部・教授  
 研究者番号：10283706

研究成果の概要（和文）：20世紀以降のフランスにおける現象学と科学認識論という二つの哲学的系譜が交差する地点で、主に生命と認識についての問いをめぐってこれまでなされてきた探究に考察の焦点を当て、両系譜の対立によって隠蔽されてきた様々な事柄を明らかにすることを試みた。そのことから、生命/技術/科学を包括すると共に、人間/機械/自然を包括することのできる新たな自然哲学の構築が今日において可能であり、また必要であるという帰結が得られた。

研究成果の概要（英文）：This research has an objective of revealing of various matters hidden by the opposition of two philosophical genealogies as Phenomenology and Epistemology in France from the 20<sup>th</sup> century onward, focusing the questions of life and knowledge in the intersection of these two genealogies. As a result, today, it is possible and also necessary to construct the new natural philosophy which includes Life/Technique/Science as well as Man/Machine/Nature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：認識・技術・生命・自然・シモンドン・フーコー・カンギレム・ドゥルーズ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景にあったのは、フランス哲学における「経験・意味・合理性の哲学」と「知・合理性・概念の哲学」という二つの主要な系譜の対立という図式である。この対立は具体的には20世紀以降、ドイツから導入されて独自に展開したフランス現象学と、この現象学に対して批判的なフランス科学認識論との対立として位置づけられる。従来のフランス哲学についての研究も何らかの形でこうした対立図式を背景にして営まれてきたことは否定し難い。しかしこのような対立を前提とすることで見過ごされてしまったものがあるとすれば、この対立図式それ自体を問いに付さざるを得ない。そこでフランスにおける現象学と科学認識論の関係とはいかなるものかを正しく見極める必要があると考えたのが本研究を開始するにあたっての動機であった。

### 2. 研究の目的

従来は完全に対立するものとして捉えられてきた20世紀以降のフランス哲学における現象学と科学認識論の関係を哲学的に問い直すことによって、表面的には対立するように見える両者の関係の実態を描き出すと共に、その対立点が強調されるあまり問題とされることなく隠蔽されてしまった論点を発掘すること、またそうした論点の持つ現代的意味をより一般的な哲学史のコンテキストの中に位置づけて考察し、その成果から現象学と科学認識論を新たな方法で関係づけることによって、現在及び今後の哲学のあり方とその任務がいかなるものかについて新たな視点を獲得することが本研究の目的である。より具体的には、第一に、現象学と科学認識論が「認識」と「技術」をめぐる問いの解明に向けて積極

的に切り結ぶことのできる条件を見出すこと、第二に、「生命」と「自然」という問題について現象学と科学認識論を交差させ、生けるものとしての生命的存在の本質解明と、そのような存在による学問的営みとしての「哲学」の意味を確認すること、この二つである。

### 3. 研究の方法

本研究を遂行するためには、対立的なものとして理解されることの多いフランス現象学とフランス科学認識論という二つの系譜の関係の実相を描き出すことが必要になる。そこでまずこれら二つの系譜にそれぞれ所属しつつ、対立関係を構成するものと認められる哲学者たちの理論や概念について、それらが現われるテキストに即して検討することが基本的作業として不可欠であった。そのために現象学と科学認識論に属する哲学者たちのテキスト、及びそれに直接または間接的に関連する様々な副次的なテキストを、研究資料として収集し、その各々を細部に至るまで綿密に解読しながら、全体を統一的に再構成していく必要があった。そこで平成19年度から平成21年度の各年度とも、日本で調査できる資料は勿論、フランスにおいてしか調査できない資料を発掘し、収集・整理・解読することを主要な作業とした。特にフランス国立図書館での調査は研究遂行にあたって極めて重要であった。しかし現象学と科学認識論のいずれについても膨大なテキストの集積が存在しており、可能な限り網羅的に資料調査する必要があるとはいえ、これらテキストの全てについて調査を行なうことは不可能であるので、幾つかの制限を設けざるを得なかった。本研究では二つの系譜の関係を再考するために「認識」・「技術」・「生命」・「自然」という四つの

主題を設定し、これらの主題に即した考察を掘り下げることに有益であるということに基づき、調査対象としての資料の取捨選択を行った。こうして資料調査と解説を継続しながら、フランスにおける現象学と科学認識論の対立という構図を支えると同時にそうした状況についての誤認を生み出してしまう、潜在的かつ根本的な従来の哲学的思考の枠組みを明らかにするためのフランス哲学史の再構成を行なうと共に、「認識」・「技術」・「生命」・「自然」という主題に即して、科学認識論と現象学の双方を包括することができるような新たな哲学的思考の可能性がどのようなものであるのかを明らかにするという本研究の最終的な目標達成に向けて研究を進めた。

#### 4. 研究成果

二十世紀以降のフランスにおける現象学と科学認識論という二つの哲学的系譜の中で、自然及び生命という問題に対して現在までどのような考察が為されてきたか、またそれを踏まえて今後どのような哲学を展開しなければならないかを、それらの系譜が交差する地点に注目しつつ次の手順で検討を進めた結果、以下のような成果が得られた。

(1) フランス哲学における「経験・意味・合理性の哲学」と「知・合理性・概念の哲学」という二つの主要な系譜の対立という図式を明確な形で打ち立てたミシェル・フーコーの哲学に立ち戻り、フーコー自身がその「考古学」によって哲学史をどのように理解しているかを明らかにすると共に、その「考古学」の手法をフーコー自身に適用することで、彼の哲学史理解がいかなるネットワークの中で形成されてきたかを見極めることを試みた。その結果、1950年代以降のフーコーの哲学史理解においてカントの存在を決定的なものとして

位置づけることの意味と、そのカントの位置づけを可能にしたものとしてのハイデガーのカント解釈の影響が明らかになると共に、フーコーの哲学形成にとって不可欠なハイデガーの受容にあたって媒介となっているジュール・ヴェイユマンの重要性が見いだされた。そしてこのヴェイユマンにおけるフランス科学認識論と現象学との分裂がフーコーにおいてもそのまま反映されており、このことが「経験・意味・合理性の哲学」と「知・合理性・概念の哲学」の対立の背景として伏在しているという観点を得ることができた。

(2) 認識という概念を技術という観点から見直すために、ベルクソンの哲学の中ではこれまではあまり注目されることのなかった技術というテーマを取り上げ、「経験・意味・合理性の哲学」の源流の一つと看做されるベルクソンによる技術の位置づけについて考察し、技術という観点からフランス哲学史の中にベルクソンの哲学を位置づけると共に、技術と科学的認識の関係がいかなるものであるかを、特にベルクソンから大きな影響を受けたジョルジュ・カンギレムの技術哲学をベルクソンの技術哲学と対置させつつ検討した。生命と連続的でありながら創造性を消失し生命から離れようとする傾向を技術の中に見る前者と、生命と連続的だからこそ創造性を保持し続ける点に技術の特性を見る後者という対照的な立場を取っていた二人が、晩年においては互いに逆の立場を取るようになったという事実をテキストに即して明らかにした。そのことから、技術と科学的認識の間に介入する生命について考察する必要があること、技術が科学と生命に対してどのように位置づけられるかに応じて異なる技術哲学がそれぞれ整合的に生じ得ること、したがって「技術か生命か」という単純な二者択一を行なうのではなく、

「技術と生命」の両者を両立可能なものとするのできる技術哲学の可能性、そしてさらにそのような技術哲学を包括し得るような自然哲学の可能性を、20世紀後半以降の技術の進展も考慮に入れつつ見いだす必要があることが判明した。

(3) 科学認識論の系譜におけるジルベール・シモンドンとジョルジュ・カンギレムの生命論を検討することで、生命という概念が個体化の概念と切り離せないことが判明した。このことから、シモンドンやカンギレムの哲学における生命概念を、その同時代の極端な還元主義に走ってしまった成立期の分子生物学からではなく、その現在の進展から見直す必要性が理解された。そこでシモンドンやカンギレムの生命論を踏まえたジル・ドゥルーズの哲学を検討することにし、その哲学形成にあたって大きな影響を与えたシモンドン、レーモン・リュイエ、アルベール・ロトマンらの哲学とドゥルーズの哲学とを比較検討し、彼らの哲学を受容することによってドゥルーズの哲学体系が可能となった様を描き出すと共に、彼らとの差異によって浮かび上がるドゥルーズ哲学の特異性がいかなるものかを明らかにした。また21世紀の今日においていかに自然を思考すべきかという問いに答えるために、シモンドンとドゥルーズの哲学を再び取り上げ、まずドゥルーズの哲学形成にあたってシモンドンのシステム概念がどのように影響を与えたのかを振り返りながら、そのシステム概念と個体化の問題の連関をシモンドンの哲学に即して確認した。次にそのような個体化が可能になる場所かつ源泉である準安定的システムがシモンドンによって〈技術と人間と自然〉を貫く根源的な「自然」として捉えられていること、またそのような自然概念が「人間と自然」、「人為的なものと自然

的なもの」、「機械と人間」という二分法を無効化すると共に、「全体」や「一者」の概念を批判しつつ繰り上げられるドゥルーズの自然哲学にとって不可欠かつ決定的であったことを明確にした。その上で、ドゥルーズの自然主義がシモンドンの深い影響化にあることを明らかにしつつ、各々の哲学に欠如しているものを示唆し、シモンドンとドゥルーズを交差させることでそれを補わなければならないこと、生命論な哲学が同時に普遍的機械主義とも接合し得る自然哲学としても展開されるような可能性を秘めていること、それゆえ彼らと共に自然を個体化システムを備えた準安定的なシステムの総体(というシステム)として考察するべきであり、今日に相応しい新たな自然哲学を練り上げねばならないことを明確にした。

(4) 科学認識論における生命概念を現象学に見られる生命概念と関係づける可能性を探るために、フランス現象学の代表的存在であるミシェル・アンリとエマニュエル・レヴィナスの現象学を取り上げ、生命概念を贈与・身体・感受性など現代現象学の成果と共に自然哲学の立場から再考する可能性を探った。まず初めに内在の哲学と言われるアンリの哲学と超越の哲学と言われるエマニュエル・レヴィナスの哲学を概観しつつ、レヴィナスのアンリに対する評価という観点から両者の近さと遠さを確認した。次に両者の遠さに着目しつつ、今度はアンリのレヴィナスに対する評価を取り上げた。アンリがレヴィナスを賞賛かつ批判しつつ提起する生命概念には、しかしアンリの哲学に最初から内包されていた或る疑問がそのまま突きつけられる。アンリの晩年の思索における絶対的な生命の唯一性と生の二重化という二つの発想が両立可能かどうか、それ自身に充足する絶対者である大文

字の〈生〉が複数の小文字の生を生み出すことに必然性があるのかどうか、もし必然性があるとすれば、それは最終的には超越の根拠としての内在というアンリの根本的な図式に抵触するものではないだろうか、という疑問である。そこから帰結するのは、アンリのように生命を純粋な内在として規定するか、あるいはレヴィナスのように生命を超越として規定するかという選択がそもそも不可能なものではないか、つまり生命を内在と超越の間でこそ捉えなければならないのではないかということである。

(5) 現代に相応しい形での自然哲学のあり方を探るために、ジルベール・シモンドンの哲学を素材として取り上げて考察した。まず今日において自然哲学が可能になる条件として、自然の非-飽和、この非-飽和の物理-化学的次元から生物学的次元への延長、それに基づいて行なわれる人間的技術による生命圏の変容という三つの事実を確認すると共に、シモンドンの哲学がこの条件を満たしているかどうかを検討するため、物理的个体化・生命的个体化・心的个体化・集団的个体化という4種類の个体化過程の解明を体系的に行なうシモンドンの个体化論の哲学と、それに基づく技術哲学の基本的な着想を、前-個体的存在と个体化という概念を中心に整理し、続く考察のための準備を行なった。次にシモンドンの「自然」概念に着目しつつ、それが人間的なものと自然的なものという対に先立ち、機械と人間の関係、機械を通しての人間と自然の関係などの根底にあるものとして位置づけられていること、シモンドンの哲学が先の三つの条件を満たしているだけでなく、それらの先行条件として自然の準安定性を提示しているということを示した。そして一でも多でもなく〈一〉以上のものとして規定される「自

然」を出発点とするような新たな自然哲学を構築することによって哲学の現代的な可能性を展開する必要があると結論した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

(1) 米虫正巳、「〈一〉以上のものとしての「自然」 — シモンドンと自然哲学(下)」、『思想』、2010年6月号、No. 1034、岩波書店、2010年6月、226～243頁、査読無

(2) 米虫正巳、「自然哲学は存在し得るか — シモンドンと自然哲学(上)」、『思想』、2010年4月号、No. 1032、岩波書店、2010年4月、34～51頁、査読無

(3) 米虫正巳、「フランス技術哲学の中のベルクソン」、『思想』、2009年12月号、No. 1028、岩波書店、2009年12月、152～170頁、査読無

(4) 米虫正巳、「フーコーと有限性の問題 — 「考古学」の考古学」、『哲学研究年報』、第42輯、関西学院大学文学部哲学研究室、2009年3月、38～88頁、査読無

(5) 米虫正巳、「哲学の〈考古学〉 — フーコーと哲学史 — 」、『人文論究』、第58巻第3号、関西学院大学人文学会、2008年12月、1～22頁、査読無

[学会発表] (計2件)

(1) 米虫正巳、「内在と超越の間の生 — アンリとレヴィナス」、日本ミシェル・アンリ哲学会第一回大会、2010年3月26日、同志社大学

(2) Masami KOMEMUSHI, 《La Nature et son système métastable : Penser la nature avec Simondon et Deleuze》, Colloque international 《Le système métastable et l'individuation — Autour de la philosophie de Gilbert Simondon》, 2010年3月24日、明治大学

〔図書〕（計 2 件）

(1) 米虫正巳、中岡成文編『岩波講座哲学第4巻 知識/情報の哲学』、「概念と方法」・「テキストからの展望」、岩波書店、2008年10月、248～250、254～256、268～272頁

(2) 米虫正巳、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編、『ドゥルーズ/ガタリの現在』、「ドゥルーズ哲学のもう一つの系譜について」、平凡社、2008年1月、490～512頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

米虫 正巳 (KOMEMUSHI MASAMI )  
関西学院大学・文学部・教授  
研究者番号：10283706

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：